

空な建築

視覚制限による感性誘起空間

指導教員 吉松秀樹教授 印

8AEB3103 池田 雄馬

1. 問題意識「雨を感じない都市」

雨が降ったときの独特な雰囲気の魅力を感じた。しかし、現代の都市ではそういった自然が織り成す微妙な変化や挙動を感じる場が失われつつあると感じた (Fig.1)。



Fig.1 自然との関係が薄くなった都市

2. 調査「雨を感じてきた日本」

日本には四季があり、雨に様々な呼び名がある。「愛雨」「慈雨」「雨花」という言葉から、愛でる気持ち、感謝の心や情緒が読み取れる (Fig.2)。また、広重の浮世絵からは旅人や町人の心情が雨の表現から感じられる (Fig.3)。これらの多様な表現には、自然の微妙な変化に対し自らの心象を重ね合わせた日本人の繊細な感性が読み取れる。

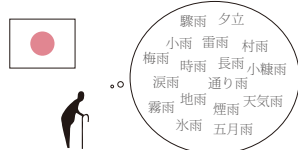


Fig.2 様々な雨の呼び名



Fig.3 浮世絵にみられる雨の表現

3. 分析「見えない雨を感じる」

雨は雨自体の形を捉えることができなくても、雨音、雨の匂い、しっとりした空気などから雨を感じ取ることができる (Fig.4)。

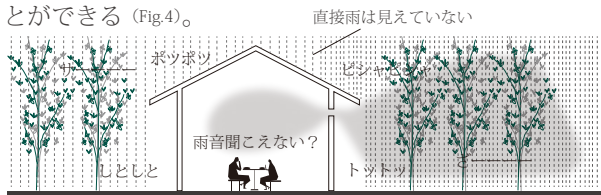


Fig.4 雨音、雨の匂い、しっとりとした空気から雨を感じる

雨を感じる空間の例として妙喜庵待庵をあげる。茶の湯のみに集中するための茶室は、視覚情報をできるだけ減らし感覚を研ぎすまさせている。また閉鎖的に感じさせないため、陰や丸い入れ隅を用いている (Fig.5.6.7)。



Fig.5 妙喜庵待庵

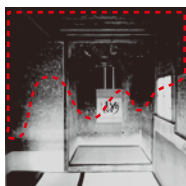


Fig.6 陰で輪郭を消す

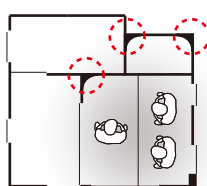


Fig.7 丸い入れ隅

4. 手法「視覚情報を制限する」

視覚情報を制限した狭い空間をつくることで感覚を研ぎすませ見えない雨を感じさせる。壁厚を変化させることで、内部空間は均質だが雨音の大きさが場所によって変化することで空間の質も変わる (Fig.8)。また、直接外部と繋げず、壁をずらすことで視覚を制限しながら間接的に雨の匂い、空気を感じる (Fig.9)。そして、陰とRの入れ隅を用い閉鎖性も和らげている。



Fig.8

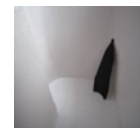
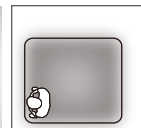


Fig.9

5. 提案「感性を誘起する住宅」

視覚を制限し感覚を研ぎすます空間をつくる事で、雨を感じる場とする。また、この住宅は雨だけでなく普段では感じる事ができない、自然の織り成す音、匂い、空気などの微妙な挙動も感じ取れる場になっている。そして、機能ごとに空間の質が変化するように、開口・壁厚を変えている。(Fig.10.11.12.13.14)。

賑やかなリビングでは壁厚を薄くし、外部との距離が近く感じる



Fig.10 Siteplan

集中したい書斎では壁厚を厚くし、外部が遠く感じる

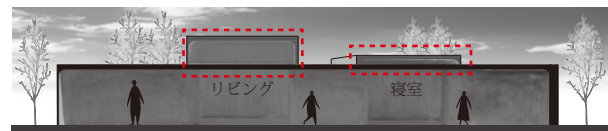


Fig.11 A-A' Section 部屋ごとに天井高を変え、内部の陰の量を変化させる

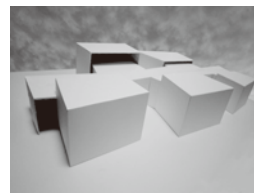


Fig.12 鳥瞰写真



Fig.13 光、音を聴く



Fig.14 厚い壁の空間